

琉球大学学術リポジトリ

明治末期と大正時代の沖縄における害虫事情

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): 害虫研究, 昭和初期, 沖縄, 分類 キーワード (En): 作成者: 喜屋武, 良好 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015242

明治末期と大正時代の沖縄における害虫事情

喜屋武 良好

(屋我地村我部)

はじめに

沖縄は冬期も割合暖かく病害虫の発生に恵まれ、明治時代から農家はその被害に悩まされていた。そのため当時から部分的ながら病害虫の研究が進められその成果も少なからずあった。しかしそれらのほとんどは未発表のまま、または発表されたものでも第二次世界大戦で大方が消滅し、今日研究を進める上に文献不備で大きな不便となっているようである。

筆者は明治42年から大正3年までの間、沖縄県立農学校(元国頭農学校)で助手として勤務し、黒岩恒方先生(博物学教師)の下において昆虫に関する研究を手助けすることができ、当時調査した記録などを今日まで保管していたところ琉球農業試験場の東清二氏に知られ、当時の害虫事情について何か記録して欲しいとの進めを受けた。もともとその記録は何かの形で公表したいと考え「沖縄の害虫」と題して昭和の初期にまとめたものであり、各種害虫の分類、形態、経過習性、防除について当時の知見をすべてもうらしたものであった。それをそのまま記述することは昆虫の分類、形態、生態など大分進歩した今日、余り意味がないし、一時はちゅうちょもしたが当時の害虫の種類、発生(大発生など)や被害などについて記録しておくことは今後の害虫研究に何らかの役に立ちますまいかと考えこゝに一部を公表することにした。

本文に先だち学名などについて補筆訂正下さった東清二氏に対し厚くお礼申し上げたい。なお恩師の故黒岩恒方先生の御指導に対し感謝の意を表し、その報文を捧げたい。

1. *Coptotermes formosanus* Shiraki

イエシロアリ

本県においていたるところに発生し、家屋、サトウキビ、クワ、マツなどに被害がみられ、マツ材は本書虫のもっとも好むものであった。

2. *Blattella germanica* Linne

チャバネゴキブリ

暗所を好み昼間は暗所に隠れ、夜間主として食料品を食害するが野外にも生息し、植え付けまもないサトウキ

びを食害し、発芽力を失わしめる害虫としても知られていた。冬期は寒さのため家屋内に生息するものも多く、サトウキビの被害も少ないが夏から秋にかけ被害が多くなった。また乾燥時においても被害が多かった。

3. *Patanga succincta* Johansson

セスジイナゴ

幼虫、成虫ともにサトウキビおよび他のイネ科植物の葉をのこぎり状に食害した。夏期乾ばつのは発生も多く、乾ばつ害と相まって相当の被害を与えサトウキビの発育を不良ならしめることがしばしばあった。年数回の発生のように冬期でも各態のものがみられた。

4. *Oxga yezoensis* Shiraki

ハネナガイナゴ

本県いたるところに発生し、冬期は成虫で苗代あるいは、サンカクイ、サトウキビ、イトバショウなどの中で生息越冬し、イネ植え後水田に来て産卵加害し、イネ収穫後は再びサトウキビ、サンカクイその他イネ科植物を加害するようであった。

5. *Gesonula mundata zonocera* Navas

オキナワイナゴモドキ

幼虫、成虫ともにサトイモの葉を好んで食害する害虫として知られていた。子虫時代はあたかもシミが書籍の表紙を食するように葉の表面より不規則に表皮部を食害するが、成虫時代は葉肉全体を食いつくして僅かに葉みゃくを残すのみとなる。イネ科植物を食害するときのはのこぎり状に食害し、主みやくを残すだけとなる。本県いたるところに発生し、年2回発生し、冬期は卵態で越冬するものようであった。

6. *Liothrips floridensis* Watson

クスノアザミウマ

クスノキ苗の大害虫と知られ、本県いたるところのクスノキ造林地ではその被害のため葉が枯死落葉することがしばしばあった。

7. *Dendrothripoides ipomoeae* Bagnall

サツマイモノアザミウマ

当時サツマイモムクゲムシと呼ばれ、年2回の発生のように、第1回は4~5月、第2回は8~9月でサツマイ

モ畑に群集して茎葉を食害いしゆくせしめた。被害のはなはだしい時は茎全体灰色となって枯死することがあり農家に多大の損失を与えたものである。

8 *Aonidiella aurantii* Maskell

アカマルカイガラムシ

ミカンの枝葉に付着して吸口を組織内に挿入し、汁液を吸収して樹勢を衰弱せしめる害虫として知られていた。

9 *Pseudocotidia duplex* Cockerell

ミカンマルカイガラムシ

加害は前種と同じで各地に発生がみられた。

10. *Parlatoria zizyphus* Lucas

クロイロクロホシカイガラムシ (ヒメクロカイガラムシ)

年2回以上の発生でミカンの茎葉、果実を加害した。

11. *Lepidosaphes gloverii* Pachard

ミカンナガカキカイガラムシ

年3回以上発生するようで好んでミカンの茎葉、果実を加害し、本県のミカン園でもっともふつうにみられたものである。

12 *Ceratovacuna lanigera* Zehntner

カンシヤワタアブラムシ

本県いたるところのサトウキビ畑で発生し、当時から重要害虫の一つであった。石油乳剤で防除したり、天敵ヒラタアブ、テントウムシの保護に努めるよう励めていた。

13. *Nilaparvata lugens* Satl

トビイロウンカ

明治38年羽地村の水田に発生し大被害を与え、同44年には羽地村、国頭でも異常発生し加害した。防除は反当1.8~3.6ℓの石油、重油、軽油、鯨油などを点々と水面に滴下し、株毎に虫を払い落とし油だるまにして窒息死させる方法を10日間おきに行なうことを励めていた。

14. *Nephotettix cincticeps* Uhler

ツマグロヨコバイ

12月から1月頃にかけてイネ苗代に襲来し被害を与えると同時に産卵し、本田に移植後はふ化した2世代目が加害した。イネ収穫後は他のイネ科植物に移って世代を繰返し、苗代期に再び水田に飛来して加害するようであった。

15. *Sogatella furcifera* Horvath

セジロウンカ

明治42年12月牧港付近に発生したのがその始めて被害

は僅少であった。発生がサトウキビの収穫期であったためかと思われている。

16. *Cavelerius saccharivorus* Okajima

カンシヤコバネナガカメムシ

本県では大正3年に始めて発生したもので、防除の結果その後しばらくの間は終息の状態であった。しかし大正13年頃から再び発生が甚だしくなり、全県に広がるようになった。当時の防除は除虫菊加用石油乳剤、タバコエキス加用石けん水を用い、また卵寄生蜂の保護にも努めた。

17. *Cletus trigonus* Thunberg

ホソヘリカメムシ

ふつうヒエブウと呼ばれアズキ、リョクトウ、ダイズなどマメ科植物を加害した。年中その発生がみられ、発生が多いときは早朝成虫、幼虫を捕殺するよう奨励した。

18. *Laptocorix corbeti* China

クモヘリカメムシ

本県いたるところで発生してイネの生育期間はイネを加害し、収穫後はサトウキビその他のイネ科植物を加害するようであった。

19. *Lagynotomus elongatus* Dallas

イネカメムシ

年1回の発生で5~6月にイネの穂に集まり加害した

20. *Eurydema pulchra* Westwood

ヒメナガメ

オキナワナガメと呼ばれダイコン、ナ類、カンラン、カブの害虫として当時から知られ、朝夕捕殺するか、デリス剤で防除するよう励められていた。

21. *Scotinophara lurida* Burmeister

クロカメムシ

明治40年、45年5月に国頭村に発生し大被害を与えたものである。

22. *Papilio xanthus* Linne

アゲハ

本虫は一時に多数発生することがないので被害程度は僅少であった。しかしミカンの幼木時代に若葉を食害し枯死させることがあった。

23. *Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer

イシガケチョウ

イチジクの葉を好んで食害するが被害は僅かであった明治45年4月沖縄県立農学校の果樹園においてイチジクを加害中の幼虫を飼育した結果イチジクの害虫として

判明したものである。

24. *Vanessa caridui* Linne
ヒメアカタテハ

ラミー、ノカラムシ、ゴボウの害虫として知られていた

25. *Brachmia triannlella* Herrich-Schaffer
イモコガ

本県いたるところに発生しサツマイモを加害した。

26. *Bedellia sommulentella* Zeller
ヒルガオハモグリガ

一名イモスムシと呼びサツマイモの害虫として知られていた。幼虫は共同で糸巣を作り、それを足場として葉に小孔を穿ち頭部を挿入して葉肉を食害した。1葉に14～20頭も集まって加害することがあり、明治38年12月羽地村のイネの跡作たるサツマイモ畑10haに大発生したのを初め、同39年、43年12月にも大発生し甚大な被害を与えた。

27. *Plutella maculipennis* Cartis
コナガ

ナタネ科作物の害虫としてよく知られていた。

28. *Sesamia inferens* Walker
イネヨトウ

当時からサトウキビの大害虫として知られていたが経過習性、防除法については充分研究されておらず、その研究が急がれていた。防除は被害茎を刈り取り焼却するにすぎなかった。

29. *Scirpophaga xanthogastrella* Walker
ツマキオオメイガ

当時から前種に比し加害は僅少であった。しかし成長点を食害された被害茎は葉が萎凋枯死し心芽なき状態となるので側芽の発生をまねき、ブリックスを低下せしめる製糖上の重要な害虫とされていた。

30. *Milania basalis pryeri* Druce
キオビエダシヤク

当時からイヌマキの害虫として知られていた。

31. *Agrotis ipsilon* Hufnagel
タマナヤガ (ネキリムシ)

ダイコン、ナス、ネギ、カンラン、タバコを加害した

32. *Aedia eucomedes* Linne
ナカジロシタバ

本県各地で毎年多少の発生をなしサツマイモの葉を加害した。

33. *Leucania separata* Walker
アワヨトウ

明治44年2～3月本県各地に大発生し、ムギ、アワを全滅せしめ、サトウキビにも被害を及ぼし農民をして大

恐慌に落し入れたことがあった。

34. *Phytomyza atricornis* Meygen
エンドウハモグリバエ

エンドウ、ダイコン、ナ類、カンラン、ネギなどの害虫として知られ各地にふつうであった。

35. *Dacus cucurbitae* Coquirett
ウリミバエ

当時八重山群島にのみ発生し、年々スイカなどウリ類に大被害をなしそのためスイカの移出禁止をまねいた大害虫であった。

36. *Epilachna vigintioctopunctata* Fabricius
ニジユウヤホシテントウムシ

ナス、ジャガイモ、トマトの害虫でデリス剤、ひ酸鉛カリで防除すべく励められていた。

37. *Aulacophora femoralis* Matschulsky
ウリハムシ

成虫、幼虫ともに年中みられ、ウリ類を加害した。

38. *Colasposoma oberthueri* Jacoby
オキナワイモサルハムシ

毎年多少の発生があったが明治45年5月に喜屋武のサツマイモ畑に大発生し甚しい被害をもたらした。

39. *Phaedon brassicae* Baly
ダイコンサルハムシ

ダイコン、ナ類の害虫として知られ、本県各地に発生被害を与え、しばしば収穫皆無となることがあった。デリス剤で防除した。

40. *Phyllotreta striolata* Fabricius
キスジノミハムシ

ナタネ科作物の害虫で乾ばつの際被害が多かった。

41. *Cylas formicarius* Fabricius
アリモドキゾウムシ

各地のサツマイモ畑でその被害があったが土壌害虫であるところから防除の困難なものだとされていた。

42. *Eugnathus squamosus* Fabricius
アオコフキゾウムシ

各地のダイズ畑で4月頃より発生し、葉に集まったのこぎり状に食害した。

44. *Hylobius orientalis* Motschulsky
クスノアナアキゾウムシ

明治44年羽地村源河の県造林地に発生したのが初めてであった。

おわりに

明治末期から大正時代の害虫44種について当時の記録から抄録した。害虫の種類を発生年代や被害や習性の判明しているものについては簡単に説明を加えておいた。